

2021年度「自由を生き抜く実践知大賞」エントリー一覧 実践事例概要

*Noは実践事例名称の五十音順

NO	実践事例名称	実践主体	実践事例概要
1	アートプロジェクト 私の場所	国際文化学部 稲垣ゼミ	稲垣ゼミは、2020年8月に茨城県ひたちなか市那珂湊で開催されるアートイベント「みなとメディアミュージアム2020」に参加、アートプロジェクト「私の場所」を実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染拡大により2021年に延期となり「みなとメディアミュージアム2020→2021」として2021年度に開催されることになった。 以降、現在に至るまで感染状況防止対策をしながら少しずつ私たちのアートプロジェクトを進めている。
2	アップサイクルマスクを通じた日本・パキスタン間の国際協力	現代福祉学部の有志3名（学生の自主活動）	2020年12月3日に開催された「SDGsで南アジアとつながる 新型コロナウイルスと障害者の生活」というミニレクチャーで、開発途上国で透明マスクのニーズがあることを知った。その後、法政大学キャンパスの廃棄物集積場にあったビニール傘や靴紐などを材料に透明マスクを試作、パキスタンの聴覚障害者団体と連携してオンラインワークショップを開催。 現地当事者からのフィードバックを受けて改良し、再び提供することにした。今年の8月には、法政大学で日本手話の講義を履修する学生と立教大学の学生から有志を募り、より規模を拡大してマスクの作成に取り組んだ。夏休み後半に完成品を現地に送ることができた。 透明マスクの材料に不要となった着物を使っていることから、私たちはこの取り組みを昨年新型コロナウイルスの影響で行うことができなかった「成人式」の代わりと位置づけている。国際障害者デーである12月3日に記念イベントを予定しており、本取り組みを成人式として成し遂げたい。
3	SDGs法政大学未来予想グランドデザイン	小金井キャンパス（情報科学部・理工学部・生命科学部）	小金井キャンパス教職科目「総合的な学習の時間の指導法」の授業において、SDGsの視点から法政大学の「2030未来予想グランドデザイン」を考えるシナシズンシップの活動です。 具体的には、2年生から4年生まで65名、10班編成のチームで「提言書とポスター」を作成しました。授業はすべてオンラインのワークショップ形式で、調査活動、グループワーク、ジグソープレゼン、ポスターセッションを通じて、議論を繰り返しながら、SDGsの視点から法政ブランドを高める提案を行いました。
4	NHK「らじらー！×すずさんラジオ特番2021」	自主マスコミ講座 有志チーム（47名）	NHKの#あちこちのすずさんプロジェクトの一環で企画されたラジオ番組。そこに関東代表として参加しないか、とNHKの職員の方からお話を頂き、リモートワークのみで「戦争」を題材にしたラジオ番組を制作しました。 「この世界の隅に」に登場したすずさんのように懸命に戦時中を生き抜いた方に、若い視点でインタビューなどをするラジオリポートとなっています。全国の大学から5大学が参加しましたが、法政大学は唯一2チームでの参加をさせて頂くことが出来ました(他の大学はそれぞれ1チーム)。番組制作では特に10代～20代の年齢層をターゲットに設定。 戦争について少しでも関心・興味を持っていただけるように工夫をし、学生1人1人が目標を持って番組を制作しました。公共の電波に声を寄せ、多くの方に戦時中の人々のエピソードを発信することで、実際に30分不足らずに100件を超えるツイート(反響)を頂くことが出来ました。
5	海外フィールドスクール（表象文化コース） 海外研修プログラムのオンラインによる取り組み	国際文化学部	海外フィールドスクールは、国際文化学部での基礎的・専門的な学びスタディ・アブロードなどの留学プログラムにおいて培われた異文化間のコミュニケーション力を十分に活用し、より専門性の高い知識、研究方法、表現方法を海外研修を通じて習得することを目的としている。 2020年度は新型コロナウイルス感染拡大により東南アジアへの渡航が不可能となったが、同科目の学びの機会を継続することが重要と考え、2021年度は芸術や文化活動に焦点を当てた「表象文化コース」をオンラインで開講することにした。
6	GAFAMラボ	理工学部 加治木基洋 ほか他大学学生	コロナ禍で機会損失の大きかった大学1,2年生。そういった方達に、「挑戦する勇気ときっかけを提供したい」という思いをぶつけることで、日本マイクロソフト社の協力をいただきました。 日本マイクロソフト社の方にご登壇いただき、これからの社会の流れ、今やるべきこと、身につけておくべきスキルなどをお話していただき、学生が真剣にキャリアを考える機会を創出。 ワークショップや学生×マイクロソフトのトークセッションの時間を設けることでインタラクティブかつ楽しいイベントに。参加者から、高い満足度を得ることができました。
7	COVID-19パンデミック下における留学生への学習支援	キャリアデザイン学部 坂本ゼミ	新型コロナウイルス感染症パンデミック下での学習支援活動として、孤立しがちな留学生とのネットワークの構築、小中学校のためのESD解説動画の制作、夜間中学校での映像制作支援、他大学の学生とのティーチンを実施してきた。その中でもとりわけ、強い関心を持って取り組んでいるのは都内に住む留学生との交流ネットワークの構築である。 デルタ株が猛威を振るう時期に孤立した留学生の意識を調査した結果、留学生は孤立しており、学生間交流を強く望んでいることがわかった。今日、留学生が孤立しないための学習支援ネットワークを強化継続させることが強く求められている。
8	コロナ禍における社会心理学の貢献を考える	グローバル教養学部 Self and Culture Seminar（新谷ゼミ）	新谷ゼミの学生は、新型コロナウイルスの感染拡大に関する社会心理学の研究論文を毎週3編ずつ輪読し、コロナ禍で人々が直面する様々な問題を社会心理学の知見を用いてどのように解決できるかを議論した。議論を深めるために、論文の知見を自分の身の回りの事象と関連付けた質問を各自2つ考え、ディスカッションの準備を行った。さらに他の学生の考えた質問の1つに自分なりの回答を毎回用意し、セミナーの時間内で議論するという作業を毎週行ってきた。 最終的には、それまでの議論を通して得た知見をもとに、感染拡大が引き起こした身近な問題一つ特定し、その原因の分析と解決策を3人ずつのグループで考え、プレゼンテーションした。
9	GIS Relay Program	グローバル教養学部	コロナ禍で学部生同士の交流が難しい中、学期初めの4月と9月に学部の全ての1年生から4年生までの学生を12人ずつの36のグループに分け、Zoomにて学年を越えた交流を行っています。学年ごとに決められたトピックについて話します。上級生は就職活動やゼミについて、下級生は大学に入ってから発見や学校生活についてなど他学年の役に立つような情報を交換します。Zoomで交流のきっかけとして連絡先を交換し、学年を跨いで日頃の悩みや履修のアドバイスなどのできる仲間を作りました。 成果としては、授業の大部分がオンラインで展開されていたために先輩や同学年の学生との交流の少なさを補うことができました。これまで外濠6階のラウンジに行けば、GISの先輩に会うことができ、様々な情報を仕入れることができたのですが、今の1、2年生はその機会がなく、孤立しているようでした。リレープログラムにより、大学生活の情報集めに困っていた1、2年生のサポートや、コロナ感染の影響で大きく変わった3年生の就活のサポートなどができるようになりました。
10	外濠市民塾	デザイン工学部（エコ地域デザイン研究センター）	外濠に関する研究成果や提案をまとめた「外濠—江戸東京の水回廊—（法政大学エコ地域デザイン研究所編、2012年）」の出版を契機に外濠周辺の大学や企業が集まり、「外濠に関する知識を共有し、意見を交わすことで外濠の将来について考える」ことを目的に2013年に外濠市民塾が発足しました。 現在の活動主体は、法政大学・東京理科大学・日本大学・東京都立大学・中央大学の学生および教員、三輪学園大学の生徒および教員、大日本印刷・新宿区立中央図書館・電通tempoとなっており、月1回程度運営委員会を実施して活動の企画運営を行っています。 現在は、法政大学江戸東京研究センターおよびエコ地域デザイン研究センターの活動の一部として位置づけられています。
11	今こそ密な思い出を「zoom学童」	法政大学ボランティアグループ Crocus	小学生とzoomでミニゲームや実験を通して交流する。 例) ミニゲーム：ものとり、折り紙説明ゲーム、これは何でしょうゲーム etc. 実験：お家で火山を作ろう、片栗粉でスライム etc. 【成果】 小学生はもちろん、参加してくれた大学生も楽しめたという感想をいただきました。PR不足で想定したほどの参加者は集まらなかったのですが、参加してくれた小学生にはとても満足していただけたと思います。
12	私たちの暮らしへの気候影響を明らかに	文学部地理学科山口ゼミ（気候ゼミ）	2017年4月よりゼミ活動として、私たちの暮らしへの気候影響を中心に研究を行っている。地球温暖化をはじめ、ヒートアイランド現象など私たちの暮らしへの気候影響は様々な形で表れている。日々の私たちの暮らしに関わる現象を取り上げ、気候との関係を明らかにすることで、気候変動に適応した社会の形成へとつながっている。 その成果は、学生一人一人の卒業論文としてまとめられ、学会等の発表コンテストにおいて優秀賞を受賞した学生もいる。また、卒業研究を活かし、就活に取り組むことにより、希望の職種に就き、様々な業界（気象キャスター、公務員、コンサル等）で活躍している。 コロナにより、外出制限等がある中、創意工夫を凝らし、少人数での観測、大学キャンパスを最大限活用した観測（ゲート棟屋上緑化、大内山庭園、BT26階からの富士山、多摩キャンパステニスコート）等を実践し、「法政大学で学んでよかった」と実感できるよう指導している。
13	上海外国語大学共同ゼミ	国際文化学部 国際文化学科 桐谷・熊田ゼミ	桐谷・熊田ゼミでは2日間にわたって上海外国語大学日本文化経済学員の学生と共同ゼミを行いました。当初は実際に上海に私たちが赴いてゼミを行うことを予定していましたが、コロナという厳しい状況からオンラインでの実施への変更を決定しました。9月28日には交友を深めるためのアイスブレイクを行い、10月1日は文献『世界書店紀行』についての意見交換とインスタレーション作品制作の話し合いをグループディスカッションを通じて行いました。 『世界書店紀行』のディスカッションでは、互いの国から見る書店や読書の在り方について意見交換をし、文献についての感想や疑問を出し合いました。中国の学生からは特にネット通販が発達しているという意見がよく挙げられていました。書店で本を買うよりもさらに安い値段で本を購入することが出来るため、書店の需要が低くなっているようです。他にも中国の書店に関する様々な意見が挙げられていました。普段ゼミ生のみで行っている文献精読を上海の学生と行うことで、自分たちとは異なる視点からの考えを知ることが出来ました。
14	新型コロナ感染防止対策：体育会への指導 ～動画と対策確認テストによる～	保健体育センター	本件は、2021年8月より感染が爆発的になった新型コロナウイルスへの感染防止のため、体育会および第II体育会の部員に向けて行った、告知と教育のための施策である。 保健体育センターは体育会各部に向けて、感染防止の対応を徹底するよう、かねて周知していた。しかし今年7月下旬から、デルタ株とみられるウイルスにより、それまでの「3密」防止だけでは感染を防げないのではという実例が増えていた。また体育会各部では、感染者（もしくはそれが疑われる体調不良者）が発生した際でも、不正確な認識による対応から、感染の拡大やそれに伴う活動停止を招くことが少なからずあった。 この告知にあたっては、これまでと同じやり方・中身では、内容の周知徹底が行き届かないと考え、ビジュアルなコンテンツとして徳安保健体育センター長によるメッセージ動画を制作した。またインタラクティブなコンテンツも用いたいと考え、自分の認識が正しいかどうかを自身で即確認できるクイズ（Google フォーム）を制作した。

2021年度「自由を生き抜く実践知大賞」エントリー一覧 実践事例概要

*Noは実践事例名称の五十音順

NO	実践事例名称	実践主体	実践事例概要
15	日本語教育プログラム(JLP) ボランティア学生スタッフによるJラウンジの運営活動	日本語教育プログラム(JLP) Jラウンジ学生スタッフ	本活動は、日本語母語の学生スタッフが、法政大学の留学生に対して日本語での交流の場を提供することを目的としています。予め用意された教科書等の例文からは得られない流行や若者言葉など日々変化する日本語や文化に触れる機会を用意することで、参加者は実際の会話から互いの文化を体験・理解することができます。 活動を通じて、留学生は「生きた日本語」に触れることができ、学生スタッフは留学生から学びながら視野を広げることができる、いわば、「交友のプラットフォーム」を目指しています。 このように、本活動は、留学生と学生スタッフが相互に自己開示を行い、自らの目と耳で相手との共通点・相違点に出会い、異文化への理解をより一層深めることに主眼を置くものです。
16	福岡県八女市星野村における空き家問題解決に向けたアクションリサーチ	理工学部 創生科学科 学際宇宙ゼミナール	福岡県八女市星野村（以下、星野村）において、地域に根ざした空き家問題の課題発見と解決策の実践である。 近年、全国的に問題となっている放置空き家に対して、行政による法整備や流通施策が進められているが、地域レベルでは見えない課題が山積みである。ゼミから派遣された代表学生の戸澤氏は、修士研究のため長期滞在している星野村でフィールドワークを丁寧に進め以下2つの課題を定義した。 1つめの課題は、荒廃した空き家に対する負のイメージである。一般的な不動産物件は管理会社によって綺麗に管理されているが、放置空き家はゴミ屋敷のように荒廃していることが多く、移住希望者は、内見時、物件に対して良い印象を持ちにくい。しかしながら、以前の居住者が当時の状態で立ち退いていることから生活用品がそのまま残っており、中には貴重な食器や家具も含まれている。 そこで、戸澤氏は独自のアイデアによって、一見不要品のように見えるゴミを宝の山と再定義し、所有者や移住者から許可を取った上で、宝探し感覚でできる空き家片付けプロジェクトを立ち上げた。ただ、一人で家一軒片付けることは容易ではないため、これまで、法政大学のゼミ生に加えて、地元の企業家と連携を取りつつ、九州大学共創学部の学生からも巻き込み、片付けプロジェクトを実施した。その結果、学生が地域活動に携われる機会を創出できたことに加えて、移住希望者のスムーズな移住を支援している。 2つめの課題は、星野村には空き家が160戸以上存在する一方で、実質的に流通可能な物件は少ないことである。これは1つめの空き家片付けプロジェクトを進めていく過程で発見された課題で、空き家を提供したいと言っている持ち主（ともしき人物）が、実は法的な所有者ではなかったり、存在する多数の空き家は、近隣住民によって空き家であると認識されているだけで、所有者自身は手放す意向がなかったりする物件も多い。そこで、戸澤氏はフィールドワークによってエビデンスを積み重ね、星野村で実際に利活用可能な空き家を精査している。例えば、近隣住民の証言だけでなく、真の所有者を探し出し、その所有者から直接ヒアリングすることで、手放す意向があるかどうかの確認に加えて、手放す場合何が障壁になっているかを丁寧にヒアリングしている。 その結果、少しずつではあるが流通可能な物件を増やし、空き家片付けプロジェクトの推進に活かしている。
17	文芸作家を招いた「作家特殊研究」の授業実践	人文科学研究科	毎年第一線で活躍する文芸作家に担当を依頼し、その文芸作家の作品を研究するという授業であり、作品を読んだ受講生が作者自身と対話することで、従来の文学作品研究では引き出せなかったような新しい視点や作者自身の証言を引き出し、作家研究・作品研究への実践的な寄与を目指す。 研究の成果は、『「作家特殊研究」研究冊子』として毎年刊行しているが、2020年度は新型コロナウイルスの影響があっても、例年どおり冊子をまとめることができた。
18	PASS活動の改善に向けた提案書の作成	法政大学国際高等学校2020年度3年IV期特別講座 「地球市民教育をつくる」PASS活動改善立案チーム	「地球市民教育をつくる」は、法政大学国際高等学校（以下、法政国際高校）で2020年度の3年IV期特別講座として設定されていた科目である。この授業では、当時の高校3年次が法政国際高校の地球市民教育を見据えた企画書を作成させ、法政国際高校に「遺産」を残すということが最終目標として設定されていた。授業形態としては、序盤に学生自身の興味を元にグループに分かれて、その後各々での作業を進めて行った。 この授業において、私たちは、法政国際高校の既存のプログラムである、PASS活動に着目した。PASS活動では、生徒が自身の興味・関心に沿って社会課題にアプローチすることが求められており、地球市民として必要な素養を身につけることができるプログラムとなっている。 また、PASS活動は地球市民を育成するという目標を掲げており、当時の法政国際高校において地球市民教育を体系化したプログラムであると考えた。そのため、法政国際高校が掲げる地球市民の輩出という目的を達成するための根拠をなす活動であると言える。 そこで、私たちは、実際にPASS活動を在校生として体験し、感じたさまざまな問題を解決しつつ、PASS活動が地球市民を育成するようなプログラムへと発展させることに着目した。異なるコース（グローバル探究コースと国際バカロレアコース）に所属している生徒2人でPASS活動を批判的に振り返り、現状分析から出た課題に対する解決策を考えた。
19	『Fly High with English!』	グローバル教養学部 小堀セミナー	この『Fly High with English!』（小・中学生向けオンライン英語学習講座）は、当セミナーでの英語教育・研究活動の一環として運営している。本講座においては、通常は、直接小学校に訪問する形式での対面による英語出張授業を実施していたが、特に昨年来のコロナ禍の中、学習の機会に大きく支障を生じた児童・生徒の困難な状況が多く報告されたことを受け、彼らの英語学習をサポートするべく、小・中学生向けのオンラインでの英語講座を実施することになり、現在では、対面での出張授業とともにもう一つの新たな英語学習指導方法として実施され、その運営に当たっている。 当セミナーでは、このオンライン英語学習講座の企画、立案、運営、またそこでの学習指導等の実践を通して、各役割分担の検討および各役割担当者との連携、スケジュール管理、参加募集、受講生およびその保護者との直接の連絡のやり取り等を日々体験し、さらなる本講座実施実践の充実に向けて邁進している。
20	法政マスク・除菌シート寄付プロジェクト	自主マスコミ講座34期有志	本活動の目的は二つあります。 1つ目は、コロナ禍での若者の軽率な行動が問題視される中で、我々が自ら医療面に直接的な働きかけをすることで、他の学生に問題意識を提起することです。 2つ目は、このような活動を他校に先駆け学生主導で行うことで、本校のステークホルダーとの関係強化に繋げるということです。この2つの目的のもと企画提案を大学側に行い、交渉の結果、法政大学後援会様より予算70万円を頂戴しました。我々が企画・デザインした「法政マスク・除菌シート」を1セット500円にて1,000セット分販売し、売上全額50万円を寄付するというプロジェクトです。 まず始めに、デザインや使用用途に関するアンケートをもとに販売計画を立て、その後は株式会社エイチ・ユー様の全面協力のもと、実行に移しました。販売促進としては、ポスター制作やブログでの発信、また本学出身の参議院議員・朝日健太郎さんを始め、各地のアナウンサーの方々に呼びかけ、活動の普及に協力していただきました。そして最終的には日本赤十字社を通して50万円を寄付することができ、日本赤十字社金色有功章と社長感謝状を授与されました。 本活動を通して、法政大学のタテの繋がり・ヨコの繋がりを強く実感し、法政大学という“ワンチーム”を再確認することが出来ました。
21	法政大学懸賞論文に挑み続ける	国際文化学部 松本ゼミ	このゼミでは実践知＝フロンテスは「それ以外の仕方においてあることの可能なことから」に関わるものと捉えて学んでいる。正解がないので、アリストテレスが書いているように、論証ではなく思量に力点を置いている。そうした力を養うために毎年多くのゼミ生が挑戦しているのが法政大学懸賞論文である。法政大学のブランディングという点で、懸賞論文は大学教育の正攻法を貫いた制度だといえる。 思量は1人でやるだけでなく、複数で議論しながら「あでもない」「こうでもない」と頭を悩ませるプロセスである。それによって、相手の思考の懐に入って考える訓練を積むことになる。こうした「団体戦」と、執筆や調査という「個人戦」の両方を有機的に繋げることで、実践知を深めることが可能である。2017～2020年度の4年間の応募論文数は31編、うち最優秀2編、優秀1編、入選9編、佳作13編が表彰されている。
22	法政大学内生理用品無料設置プロジェクト	Voice Up Japan法政支部	コロナが流行ってからますます多くの人たちが金銭的に厳しい状況になってしまい、生理用品を買うことも困難になってしまっています。1日にナプキン1枚だけで過ごす人もこのコロナ禍で目立つようになってきているほどです。このように生理の貧困がますます進み、生理がある多くの人がこの厳格を受けている現実を知りました。 そこで、Voice Up Japan法政支部から、グローバル教養学部や、文学部、社会学部に所属する7人のメンバーを集め2021年5月から活動を始めました。今まで9回以上のミーティングを行い、生理用品の設置案や、なぜ生理用品の設置が学校に必要ななどを学び、話し合い、資料集めとスライド作りを行いました。また、そのスライドのプレゼンテーションを日本語と英語の二つの言語で行い録音をしました。その動画とスライド資料を様々な学部の教授の方々に送り、いただいたフィードバックを元により良い内容になるようにブラッシュアップをしました。 法政大学生を対象としたアンケートも行い、現時点で162件の回答を受け取りました。このアンケートは法政大学生がいままで「生理」に対して困った経験や、どのような思いを抱えているのかなどを聞いたものです。また、アンケート上で生理用品無料設置についての意見を聞いたところ、ほぼ100%に近い学生があると助かると回答しています。生理用品が実際に設置されるよう、これからもこのプロジェクトをメンバー一丸となり進めていきます。
23	本でつながるコミュニティ 法政ブックLab	図書館事務部市ヶ谷事務課	「法政ブックLab」は、課題本を読んでオンライン読書会に参加し、オンラインコミュニケーションツール「Slack」でディスカッションすることで、読書習慣が身に付くことを目指す「本でつながるオンラインコミュニティ」である。 図書館事務部では、コロナ禍が続く中においても、学生の読書のニーズを掘り起こし、読書に親しむ学生間でつながるコミュニティを提供すること、読まない層に対して本を読むきっかけ作りを与えること、本を利用してオンラインコミュニティを形成して学生らの「居場所」を提供することをいかにして実現するか検討を進めてきた。 事務部の職員の中からアイデアを出して検討した中の一つの取り組みとして、課題本から読書を進め、読書習慣を身に付ける実践事例を行っている。この企画を実施に向ける際、学生らの期待は予想を上回るものと感じ、学生の読書の関わりを深く考えるきっかけにもなった。